佛教の影響より見たる萬葉集以後、古今集に至る和歌

有川武彦

國文學の黃金時代、古典文學の精華として後世に範を垂れた我が平安王朝の文學も、萬葉集以後に於て、古今和歌集の表れるまでには、たいして注目すべきものはない。

即ち此の期間は準備時代の過渡期であつた。而して此の過渡期の文學界即ち和歌界を代表するものは所謂六歌仙の人々である。併し其等の人々の詠歌の現存せる主なるものは殆んど凡て古今集に集められてゐるから、茲には古今集を中心として論じたいと思ふ。

本邦最初の勅撰和歌集、我が古今和歌集は、醍醐天皇の延喜五年、紀貫之を筆頭として凡河内躬恒、紀友則、壬生忠岑が撰者となつて撰進したもので、卷の數は廿、歌の數は千百餘首である。萬葉集以後、平安朝になつてから、愈々佛教は普及され、寺院の創建は帝都以外の各地に行はれ、物詣でとして貴賤男女相爭ふて洛中洛外は勿論、遠く初瀨、大峯までも出かけた。然るに其の佛教の影響は、古今和歌集には餘り多くは表れて居らぬ。今試に本集に出てゐる寺院靈場の名をあげて見ると、

雲林院　下つ出雲寺　花山寺(元慶寺)
山(延暦寺)　石山　西大寺
石上寺(奈良)　初瀨

などである。而して其等の靈場寺院に關係ある歌の作者は大抵僧侶である。

扨て次に佛事及び其れに關係あるものでは「舍利會に詣でた」とか、「頭を卸した」とか、「喪で山寺に籠つた」とかいふことが記されてゐる。

あしびきの山邊に今は墨染の
　衣の袖のひる時もなし(哀傷、讀人不知)

皆人は花の衣になりぬなり

苔の袂よ乾きだにせよ（哀傷、遍昭）

藤衣はつるる糸はわび人の
涙の玉の緒こぞなりける（哀傷、忠岑）

と云ふやうに、「墨染の袖」とか「苔の袂」とか、「藤衣」とか佛教に關係ある詞が本集に多く表れて來た。猶ほ「闇浮の身」といふやうな佛教語を、子音nを省きpの音をbの母音に變じて、和かく歌語として用ひたものもある。

死出の山麓を見てぞ歸りにし
つらき人よりまづ越えじとて（哀傷、兵衛）

といふは、兵衛といふ女が薄情男を怨んで詠んだ歌であるが、此の「死出山」といふ詞は和製の經文、十王經に出てゐる詞ださうである。

つつめども袖にたまらぬ白珠は
人を見ぬ目の涙なりけり

是れは、安部清行朝臣が、下つ出雲寺で人の佛事をした日に、眞靜法師が導師で說いた御經の詞を歌に詠んで美人小野小町に贈つたものであるが、これは法華經の五百弟子品にある衣裏寶珠の句を以て詠んだのである。此の衣裏寶珠の話は餘程當時の人の面白く感じたものと見えて、後の歌や文章などに頻りに用ひられてゐる。

佛教の影響より見たる萬葉集以後、古今集に至る和歌

因に云ふ、僧正遍昭の

蓮葉の濁りに染まぬ心もて
何かは露を玉と欺く

の歌は「夏の部」に出てゐて、「蓮の露を見てよめる」としてある。然るに、後のペダンチックな注釋家によると、是を法華經涌出品の「世間の法に染まざること蓮花の如し」といふ句から出たものであると云ふ。次に又

行く水に數かくよりもはかなきは
思はぬ人を思ふなりけり

といふも、涅槃經の「是身無常にして念々に住せず……水に畫くが如し、隨つて畫けば隨つて合す云々」の文句から出たものといふ。併し兩者とも餘りに穿鑿に過ぎて居はすまいか。何も典據を一々法華經や涅槃經までに求めないでも、古今集の作者たるもの、是れ位の創作力はありさうに私には思はれる。

扨、今迄は單に形に表れたものや詞に就いてのみ述べたが、以下思想に關して調べて見ると、

無常思想に關しては

世の中は何か常なる飛鳥川
昨日の淵は今日の瀬となる
（雜下、讀人不知）

と飛鳥川の變易に世の中の無常を感じ

明日知らぬ我身と思へど暮れぬ間の
今日は人こそ悲しかりけれ（哀傷）

と紀貫之は友の死を悲んでゐる。其他「はかなき世は現とは思はれない」とか、「空蟬の世は夢の如し」とか、「露の如き我が身」とか、「水の泡の如き身」とか云ふことを詠んだ歌もある。

紅葉葉を風にまかせて見るよりも
はかなきものは命なりけり
（哀傷、大江千里）

とは作者が病に臥して、頼もしげなくなつた時、人の許に云ひ遣つた歌で

足曳の山立ち離れ行く雲の
宿り定めぬ世にこそありけれ
（物名、小野しげかけ）

と、塵や雲の如き身は無常の風に吹かれ吹かれて、行方も知らずなると嘆き、世は辛いもの憂いものと感じた。

世の中は昔よりさや憂かりけん
我身一つのためになれるか
（雜上、題不知、讀人不知）

しかりとて背かれなくに事しあれば

先づ嘆かれぬあな憂世の中
（雜下、題不知、小野篁）

世の中にいづら我身のありてなし
哀れとやいはんあな憂世の中
（雜下、題不知、讀人不知）

と云ふやうに古今集の時代は萬葉集の時代よりも一層世の中の憂く辛いことを痛感し初めた。

今更に何生ひ出らん竹の子の
憂き節繁き世とは知らずや（雜下）

といふは凡河内躬恒が、物思ひに沈んだ時、幼兒を見て詠んだ歌である。其他、苅れる田に生ふるひつぢを見ても、世を今更に飽き果てたかと詠み（秋下、讀人不知）、卯の花の咲けるを見ても、世の中を厭ふ山邊の草木かと云ひ（雜下、題不知、讀人不知）

落花を見ても、

殘りなく散るぞめでたき櫻花
ありて世の中果ての憂ければ
（春下、題不知、讀人不知）

と賞めて居る。

更に一歩を進めては隱遁思想を詠じてゐる。

いづくにか世をば厭はん心こそ
野にも山にも惑ふべらなり

（雜下、題不知、素性）

は、上つ調子な、法師として自覺の足りない素性の歌としては然るべきことと思はれる。

知りにけん聞いても厭へ世の中は
浪のさわぎに風ぞしくめる
（雜下、題不知、布留今道）

は厭世主義を喧傳したものである。

いかならん岩ほの中に住まばかは
世の憂き事の聞え來ざらん
（雜下、題不知、讀人不知）

足曳の山のまに〳〵隱れなん
憂き世の中はある甲斐もなし
（雜下、題不知、讀人不知）

世の中の憂けくにあきぬ奥山の
木の葉に降れる雪や消なまし（同、同、同）

み吉野の山のあなたに宿もがな
世の憂き時の隱れ家にせん（同、同、同）

世にふれば憂さこそまされみ吉野の
岩のかけ道踏みならしてん（同、同、同）

是等の歌は大抵讀人不知であつて、內容から見ても外形から見ても古今集撰進時代よりは少し古い時代の作のやうに思はれるものが多いやうだが、兎も角、萬葉集には、あまり多くは見出されなかつた思想である但し其の厭世隱遁思想も極めて薄弱なもののやうに思はれる。併し

世を捨てて山に入る人山にても
猶うき時はいづち行くらん

これは凡河內躬恒が山の法師の許へ遣はした歌であるが、これなごは多少徹底的に疑惑したものゝやうに思はれる。又、別に

白雲の絕えずたなびく峯にだに
住めば住ぬる世にこそありけれ
（雜下、題不知、惟喬親王）

山里は物の寂しきことこそあれ
世の憂きよりは住みよかりけり
（同、同、讀人不知）

なごは、多少負け惜みのやうにも聞えるが、世を棄てて案外に、あきらめを附けた作である。

次には又、

空蟬のからは木毎に止むれど
魂の行方を見ぬぞ悲しき
（物名、からはぎ、讀人不知）

こ靈魂の行方について心配した歌もある。

來ん世にも早やなりなん目の前に

一五三

つれなき人を昔と思はん

（戀一、題不知、讀人不知）

と現世苦惱を脱れんが爲めに、隔生卽忘の來生を希ふた歌もある。

次に古今集の中には僧侶の作者か十二人、其の中で素性法師の三十首餘と僧正遍昭の十首餘が先づ多く採られたものである。是れを萬葉集に比すれば作者に於て二倍以上、歌の數に於ても同樣である。

以上述べた所を要するに、古今和歌集は萬葉集に比して、題材も歌の數も、思想も、僧侶の作者も多少增加してゐるけれども、從來の文學史家が云つてゐるやうには、萬葉集に比して、格段に驚く程の佛教の影響は認められない。

萬葉集で最後の日附は天平勝寶三年の歌であるが、それから古今集の出來た延喜五年までには時間にしては百五十年の隔りがある。之を空間の上から見ても長岡への遷都、更に平安京への遷都など多少の變動がある。

奈良朝では天平勝寶以後、天平神護元年には西大寺が建つた。當時は道鏡御寵愛の最盛時代で出家の天皇の下に出家の大臣ある、寧ろ當然であるとの勅命で、太政大臣禪師から法王となされた時代である。

爾來重なる佛教上の出來事を數へあげて見れば、神護景雲年間には始めて安居の式日が制定され、又始めて大極殿の御齋會が勤修された。光仁天皇の御代には粉河寺、石山寺が創建せられ、無垢淨光經の印刷が出來、天長節に諸寺に於て轉經せしめられた。

桓武天皇の御代には梵釋寺、西寺、東寺、鞍馬寺、清水寺が建立せられ、僧行賀は唐から歸朝し傳教大師は叡山を開いて天台宗をはじめた。

平城天皇の御代には空海が歸朝して眞言宗が始まつた。

嵯峨天皇の御代には高野山金剛峯寺が創建せられ、仁明天皇の御代には雲居寺、慈恩寺、安祥寺が建立せられ、宮中に佛名が修せられ、大元帥法も始めて修せられた、慈覺大師は歸朝した。

文德天皇の御代には檀林寺、仙遊寺が創建せられ智證大師は歸朝して居る。

清和天皇の御代には始めて舍利會が起つた。

陽成天皇の御代には元慶寺（花山寺）、東光寺、圓覺寺が建つ。

光孝天皇の御代には仁和寺が創建せられて御室門跡が始まる。

醍醐天皇の御代には宇多上皇が落飾される、勸修寺が

創建せられた。

以上は佛教界に於て最もめぼしい事件だけを僅にあげたに過ぎないが、それでも、大寺院の創建は隨分に多い、又名僧智識は雲の如く輩出した。當時の物語、記錄等によつて見れば上は至尊から下は賤民に至るまで熱心に神社佛閣に參詣したやうである。

萬葉集以後古今集に至る間の佛教界の狀況が右の如くであつたとすれば、其の影響は今少し濃厚に文學に表はれさうに思はれる。

最も古今集は萬葉集に比して歌の數に於て三分の一しかない。歌の數の少い割合には佛教と交渉ある歌の多いことは前にも述べた。併し更に佛教界の狀況と照し合せると今少し濃厚でありさうに思はれた。然るに左樣でないのは何に由るか、其の理由は萬葉集時代には佛教が新しく來たから敏感な歌人は驚異の眼を見張つて之に注意したが、古今集時代には佛教に馴れて之を珍らしく感じなかつたので、之を歌にしなかつたのであらうとも考へられる。併しそれは極めて淺薄な想像であつて、主なる理由はまだ外にあると私は思ふ。

今、試に眼を轉じて漢文學の方面を見渡すと之は隨分盛なもので、苟も學問とか文章とか云へば皆漢文であつて、奈良朝の懷風藻以後、平安朝の凌雲集、文華秀麗集、國經集等の勅撰詩集を初め、空海の性靈集、菅公の管家文草、同後草、其他の詩集、詩篇、文集などや猶、歴史、地理、傳記、記錄、願文、金石文等に於て見る著述や文章などの盛觀は誠に素晴らしいものであつた。

是等の漢詩漢文などを見ると隨分に佛教との交渉が多く見出される。

然らば何故に我が國文學には佛教との交渉が少かつたであらうか。

これ第一、當時の學者文人が漢詩文に熱中して歌などを餘り顧みなかつた。卽ち嵯峨、淳和の聖天子のやうな一國の主腦者が漢詩文に勘能であらせられたことが勿論、尤も大なる原因であるが、其他廟堂に立つ當時の智識階級が皆漢詩文の學習に日も之れ足らずと熱中してゐたからである。最澄、空海其他留學生留學僧は唐朝の盛觀に眩惑して、歸朝後は盛に漢詩文を以て述作した。これ一つには假名の製作が發達しなかつたのと、國書で寫すことが冗長で却て不便であつた爲めに文章といへば漢文に限つて居たからでもあらう。

これに對して國文學卽ち和歌の方は如何であつたかと云へば、紀貫之は古今集の序に次のやうに述べてゐる。

「今の世の中、色につき、人の心、花になりにけるよりあだなる歌、はかなきことのみ出でくれば色好みの家に埋れ木の人知れぬこととなりて、まめなる所には花薄ほに出すべきことにもあらずなりにたり、其の始めを思へば、かかるべくなんあらぬ云々」

我が平安朝初期に於ける和歌界は、此の貫之の云つてゐる所が當つてゐるやうに思はれる。卽ち和歌は眞面目な者が眞面目にやらなかつたのである。惟れば佛教のやうな精神界のことに關する眞面目な嚴肅なものが當時の浮き浮きした色好みの歌人に取扱はれなかつたのは頗る當然のやうに思はれる。和歌も勅撰和歌集の第四番目の後拾遺集に至つて初めて釋教の部が置かれた。爾來釋教の部は有つたり無かつたりしたが末期の千載集、新古今集頃になると佛教と交渉のある歌が非常に增加して居る。併し我が平安朝も古今集時代にはそんなに大して佛教の影響も認められないのである。

一五六